



千葉大学医学部同窓会報 第117号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るの は な 同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るの は な 同窓会報編集組
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るの は な 同窓会
電話 (043) 222-7171 内線5026

千葉大学五十周年記念によせて 募金ご協力をお願い

医学部長 谷口 克
るの は な 同窓会会長 井出源四郎

会員皆様方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素より本会の活性化と発展のために種々のご高配をいただき厚くお礼申し上げます。

千葉大学は、先のご案内でご承知の通り昭和24年5月に新制の国立総合大学として発足し、来たる平成11年には創立50周年を迎えることになりました。

この間本学部も会員皆様方のご支援を始め、大学関係各位のご協力を得て、創立当初の22講座(基礎12講

座、臨床10講座)、附属病院から、幾多の改組、変遷を経て、現在の基礎16講座、臨床21講座、附属病院、1センター、2附属施設、3

附属学校に加え大学院博士課程を擁する国内でも有数の医学部に発展を遂げてお

り、心より感謝申し上げます。次第であります。

さて、千葉大学ではさきの創立30周年に当っては学内祝賀会と記念誌の出版事業を行ないましたが、今回は創立50周年と言う今世紀の節目にあたり、更なる飛躍を目指し種々の記念事業

退官記念式典 開かれる



磯野可一教授

平成10年3月で定年により千葉大学医学部の教壇を去られる三方淳男教授(病理一)、磯野可一教授(外科第二)および新美仁男教授(小児)の退官記念式典



三方淳男教授

が、3月14日午後2時より、千葉大学医学部附属病院第一講堂において医学部主催により行われた。谷口克医学部長、名誉教授代表桑田次男先生、同窓会長井出源



新美仁男教授

四郎先生の挨拶のあと、同門代表小形岳三郎(病理一)、大西盛光(外科一)、鳥羽剛(小児)の各先生からそれぞれ祝辞があり、つぎに謝辞が張ヶ谷健一助教授(病理一)、落合武徳助教授(外科二)および河野陽一助教授(小児)よりそれぞれ述べ

べられた。記念品贈呈、花東贈呈のあと、退官される3名の先生が挨拶された。つづいて記念講演が木谷雅人先生(文部省高等教育局医学教育課長)により「二十一世紀に向けた医療人の育成について」と題し行われた。

その後、記念祝賀会が附属病院第三講堂で行われ、当日の記念事業は滞りなく終了した。

るの は な 同窓会総会のお知らせ

今年度のるの は な 同窓会総会を左記により開催致します。同封の葉書にて出欠の返事をお送り下さい(6月8日必着)。

一、日時
平成10年6月13日(土)
午後3時より

一、場所
ペリエホール(千葉駅ビル5階)

TEL 043-227-1195
FAX 043-227-1195

一、総会次第
(1)会務報告
(2)議事

1 平成9年度決算承認の件
(イ) 決算案について

(ロ) 監査報告
中島理事
笹川監事

2 平成10年度予算(案)について 中島理事

3 理事補充の件 木内理事

4 同窓会賞選考について 嶋田委員長

5 同窓会賞表彰について 嶋田委員長

6 名誉会員の推薦について 近藤副会長

7 その他

(3)報告事項

1 同窓会会報関係 鈴木理事

2 その他

一、るの は な 同窓会賞表彰および受賞者挨拶

一、懇親会
午後5時40分より、会費一万円(当日受付に

て申し受けます)

学内情勢について 谷口医学部長

『尚、当日同所にて、午後2時より平成10年度千葉

県るの は な 同窓会を開催致しますので、併せて御案内致します。』また、同じく

『当日、同所、扇の間に、るの は な 同窓会報の今後のあり方について、同窓会員と編集部委員との懇談の会を十二時より設けます。この会では軽食の準備もありますので、参加希望者は左記FAXでお申し込み下さい。参加費は無料です。』

043-226-12038

瀧口正樹(昭56)

(熊大分子遺伝助教授より)

病理学第一

北川元生(東北61)

(東大助手より)

泌尿器科学

五十嵐辰男(昭52)

(国保旭中央より)

高次機能系発生医学免疫発生学

中山俊憲(東大63)

(東理大免疫生物助教授より)

人事異動

教授昇任

病理学第一

張ヶ谷健一(慶大47)

(同助教授より)

高次機能系発生医学発生生物学

古関明彦(昭61)

(高次神経助教授より)

助教授昇任

放射線医学

池平博夫(昭55)

(同助教授より)

生化学第一

(7面に続く)

千葉大学大学院医学研究科

独立専攻高次機能系の発足について

高次機能系(独立専攻) 発生医学講座教授

医学部長 谷口 克(昭42卒)

大学改革は今や全国の大学に課せられた最大の問題である。少子・高齢化にともなう社会構造が変化し、社会が要求している大学の使命は大きく方向を変えようとしている。この時期において、最も求められているものは、大学がどのような分野で社会に貢献でき、人類の繁栄と健康、文化の形成に寄与できるかという点であろう。大学独自の顔・存在価値をもつことが求められているといっても過言ではない。

また、文部省の政策も大きく変わった。これまでの様におしなべて各大学に均等に予算を配分するのではなく組織改革・拡充も大学院を中心に行うとともに、研究教育費も大学院に重点配分することが、既定方針となっている。このような状況を踏まえると、わが医学部も積極的に大学院重点化を目指して努力する事で、その使命を全うできるものと思われる。

この意味で、平成10年度千葉大学大学院医学研究科に設置が認められた独立専攻高次機能系は21世紀の生命

科学の中でも最も期待と希望に満ちあふれた二つの研究・教育領域すなわち、生命現象を時間軸で考える発生医学と脳機能に代表される統合機能学からなる大学院専任講座である。大学院独立専攻高次機能系は発生医学講座および統合機能学講座から成り、それぞれ3部門1客員部門からなる大講座制の講座編成で、研究の活性化と有機的な人事交流が期待される。

10年時限であった高次機能制御研究センター(遺伝子情報分野 斎藤隆、免疫機能分野 谷口 克、発達生理分野 清野 進、高次神経分野 木村定雄、生体情報分野 徳久剛史、各教授)を改組し、疾病制御および発生と脳の研究教育を行う大学院への転換が認められたものである。今回、発生医学講座の中に発生生物学部門の純増新設が認められ古関明彦氏(昭61卒)の教授就任が決定しており、これまでの5分野1客員分野から1分野増えて6分野1客員分野となった。

発生医学講座には協力講座として微生物第一、病理学第一、内科学第二、外科学第一、産科婦人科学、皮膚科学が参画し、統合機能学講座には協力講座として解剖学第三、生理学第一、第二、眼科学、脳神経外科学、神経内科学が参画し教育・研究を担当している。前身母体の高次機能制御研究センターは生命科学研究では世界でも有数の研究施設であり、数々の世界的発見を生み出している。科学研究費取得状況は常に千葉大学ではトップクラスで、ここ3年(平成7、8、9年)は年平均3億6、7千万円にも上っている。これも、センターに平成3年設置された国立大学では最初の外部評価委員会の助言とフィードバックの成果だと確信している。この意味で、日本における外部評価の在り方、研究組織の在り方に先駆的な一つの方向性を示したといえる。

いづれにせよ、総勢6分野1客員からなる基幹講座と12分野の協力講座を擁する巨大独立専攻科の設置は全国でも例を見ない。今後は医学のみならず他の学問領域との融合によって更なる発展をとげ、21世紀の生命科学の中核としての役割を果たす事が期待されている。本学大学院重点化

就任挨拶

群馬大学医学部長を拝命して

鈴木 守(昭39卒)



を3、4年後に控え大きな弾みになることは言うまでもない。

上州の地にまいりまして20年がすぎようとしています。群馬大学は私がもっとも長くお世話になった大学となりました。この間私の講義を聞いてくれた卒業生の中から教授になる人もでるようになりました。私自身が手術をうけなければならぬことになった時も、一流の整形外科医としてすでに広く認められている群馬大学の卒業生に執刀していただきました。ジュネーヴのWHO会議に出席した時も、会議が済んでからWHOで活躍している2名の群馬大学卒業生からレマン湖のほとりのレストランに案内されてご馳走になり、赤ワインの味が格別であっ

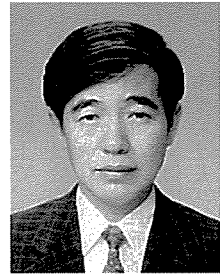
たことを思い出します。高崎の自宅には卒業生の父兄がたくさんの庭木を植えて下さいましたが、今は大きな木となっています。群馬大学に奉職し、もっとも幸いに感じていることは周囲の多くの教授と、まるで同級生のようなおつきあいをさせていただいてきたことです。そんな次第で「そろそろ頃合の年になった」事を理由にこのたび医学部長の役を仰せつかりました。群馬大学医学部教授は寄生虫学教室という、もっとも小さな講座の主任に群馬大学医学部の舵取り役を委託したのです。群馬大学という決して大きくはない大学の医学部において、このたびこのような人事を決めたことは、一定の問題提起となっているようにも思います。しかしながら事が自分自身の上に起こっているのだから客観視ばかりして感心している訳には参りません。これからの重責を考えますと、少々考え込んでしまいますが、学生が今般の医学部長人事を喜んで、という話を聞いて少なからず勇気づけられました。

幸いなことに千葉大学谷口克医学部長とは学生時代から非常に親しくさせていただきました。私が同級生の深尾立君と塚田正男君とともに京都第二日赤でインターンをやっていた時は、京都まで訪ねて下さり京都の下宿でごろ寝をしたこと、英国のリバプールに留学中も、イスラエルからの帰路わざわざリバプールまで来て下さり、我が家を訪ねて下さったことなどを思い出します。群馬大学では2回も講義をお願いし、最先端の免疫学の講義をしていたことができました。そんな訳で医学部長としては先輩の谷口先生にノリハウを教わることもできるかと期待しています。

大学は今、さまざまな揺さぶりをかけられています。医学部も例外ではありません。アカデミズムの名のもとに一般社会から切り放されたユートピアを志向して大学に残る人が多かったことの「つけ」が当然のこととして今まわってきたのだでしょう。確かに大学に硬直化した姿勢や、独りよがりの癖があることは否定できません。さまざまな変革が必要なのはよく判ります。しかし大学の基本的使命は、そう変化しているとは思われません。今は故人となられた千葉大学の恩師の先生方から、われわれは医学におけるサイエンスを学びました。それは卒業して30年、40年あるいはそれ以上の年月を経た現在もわれわれの毎日おこなう教育、研究あるいは診療活動の基本としてわれわれの内に脈々と生き続けているではありませんか。これこそ私達千葉大学を卒業した者の誇りであり、場所は変わり、時は経ても次の世代に引き継がなければならない目に見えず、形もない、しかし明らかに存在する学問の命であり、たましいであります。サイエンスというものがあつてそこに人がよっていくのではなく、血の通った「人」がサイエンスを創造し、本物のサイエンスは時代を越えて引き継がれている性質のものであるからです。大学に在籍する以上いかなる立場をまかせられても、この根幹を常に原点として吟味し、そこを土台として事を判断し、様々な計画に取り組み、変革、改革を進めるべきであろうと考えています。

東邦大学医学部整形外科第一講座

教授 勝呂 徹(昭47卒)

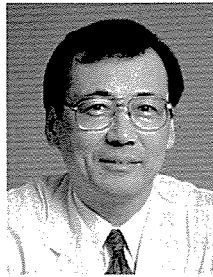


平成元年千葉大学から東邦大学へ転任し、関節外科を中心に教育、研究活動を行って来ました。東邦大学は帝國女子医専として始まり、歴史ある大学です。平成9年7月1日をもってまして東邦大学整形外科第一講座、教授を拝命いたしました。これまで千葉大学の諸先生方から多大なるご指導を頂き、また東邦大学の諸先生方、同門会の先生方にて大変お世話になりました。おかげさまで自由な診療、研究、教育を続けることができ、感謝の念にたえまません。私は故井上駿一教授の教えを頂き、整形外科の第一歩を踏みだし、脊椎外科、関節外科など多くのことを学ぶことができました。また東邦大学では、主任教授であらせられます茂手木三男教授から関節外科、脊椎外科のご指導を頂きました。今日ではややもすると自学

の内にこもり国内外の状況に疎くなりがちです。多くの師を持つチャンスを与えられた私は、大変幸せと思っております。大学にて教育、指導を行う上で、何事にも代え難い体験となっております。整形外科の進歩は、若

東邦大学医学部佐倉病院臨床検査医学研究室

教授 白井厚治(昭48卒)



平成9年7月1日付けで東邦大学医学部佐倉病院臨床検査医学研究室内の教授に就任いたしました。当研究室は、5年前に佐倉病院創設に際してつくられ、伝統はありませんが、今、何が必要とされ、それに対して何をしたらよいかを純粋に考え、追求出来る環境にあります。3年前に助教として赴任して以来、このことが最大のメリットと肝に銘じさやかながら夢を馳せてまいりました。私は昭和48年、千葉大学

い人のエネルギーすなわち人材が最も重要と思われる。さらに人工関節、人工臓器などの進歩が望まれる。今日では、自由な発想を可能とした分野を確立し、最先端の医療技術の取り入れと、時代の要請に答えられる教室の発展に努力する所存であります。今後とも宜しくご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

医学部を卒業後、第二内科(当時、熊谷明教授)に入局し、研修医を経験したのち、当時、斎藤康先生(現第二内科教授)が新しく開かれた脂質代謝研究室に入室しました。折しもホルモンの作用機構の解明が最も華やかな研究分野であり、サイクリックAMP学説が吹き荒れていました。生化学が苦手と決め込んでいた自分にとって、この思想についてゆき世界の学者に抗して研究などとうてい出来ないと思っていました。が、斎藤康先生から「脂質反応は脂質・蛋白の疎水性の一致で始まる」との御託宣をいただき、これなら自分も理解でき、これをもって脂質代謝異常、

特に脂質蓄積の見られる動脈硬化症の解決策を見いだせるとの「妄想」を抱いたのが、研究開始の動機でした。途中、アメリカ、シンシナチー大学、ジャクソン教授のもとに留学し、血中リポ蛋白代謝の初段階に働くリポ蛋白リパーゼの反応機構解析などに手を染めましたが、「脂質反応は脂質・蛋白の疎水性の一致で始まる」を天下の宝刀としてさばくと、いくつかの謎が解け、宝刀の有り難さと、研究推進には単純な原理が大切であることを学びました。

以後、多くの若い研究者らと、動脈硬化症に関わる高脂血症、肥満、糖尿病を中心に臨床を見ながら基礎研究を行い、幾多の自然の摂理の美しさに感動しながら、ついつい先を見たい欲求が抑えきれずここまで来てしまったというのが本音です。平成3年には18年お世話になった千葉大学を離れ、東邦大学医学部大森病院臨床生理機能学、助教教授で赴任、更に平成6年、佐倉病院の臨床検査医学に移籍、先に述べたごとくゼロからのスタートをはじめました。しかし、ゼロとはいえず佐倉病院の内科教室には千葉大第二内科の先輩でもあられる富岡玖夫先生が主任教授

でおられ、他部門のスタッフにも多くの千葉大出身者がおられ陰に陽に支援してくれました。

こうしてみますと、非力非才な私がこれまで仕事をにつけられてきたのは、ひとえに玄鼻同窓会関連の多くの先輩が方々でがんばり、創ってこられた基盤があったこと、また直接先輩から惜しみなくそがれた指導、鞭撻、それに多くの後輩の励ましがあったからと、改めて「同窓」のありがたさを思わずにいられません。折しも、バブルははじけ、戦後輸入民主主義はメッキがはげ、銀行の倒産が相次ぐ時代をむかえました。日本の有史以来、奇跡とも思われるこの甘い30年のつけがまわりはじめ、まさにカオスへの突入時代を迎えたように思います。これが医学界、医療界に及ばない訳はありません。しかし、ここでこそ、一〇〇余年の伝統を担う千葉大学医学部がこぞって指針を示し、混乱を鎮めるべき役目を果たすチャンス到来との見方もできると思われまふ。まさに、千葉大学医学部存続の価値が問われる時がきたと思います。これは我が東邦大学医学部にもあてはまり、より切実なものがあ

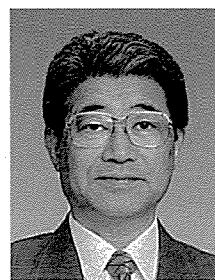
ります。

幸い、熱き心を持った学生、研修医、研究生が佐倉病院に集まり始めました。

「脂質反応は脂質・蛋白の疎水性の一致に始まる」を、「学問的エネルギー・触発反応は真実を求める教員と感

労働福祉事業団鹿島労災病院

院長 佐藤重明(昭35卒)



平成9年4月1日より、坂巻皓名院長(昭和25年卒)の後を受け労働福祉事業団鹿島労災病院院長を拝命致しました。古くから漁業と農業を産業基盤とするこの地に鹿島灘よりY字形に掘削し巨大な船舶が太平洋から直接接岸できる鹿島港が開発建設され、鉄鋼、石油化学、電力などが国の基幹産業を主軸とした一大臨海工業地帯が形成されるに伴い、昭和35年から労災病院誘致が計画されました。しかし地元医師会の建設反対により着工は延々と及び、漸く昭和56年6月開院の運びとなりました。この間、院長予

受性ある学生の親和性一致に始まる」に置き換え、非力を省みず尽くしたいと思っています。今後ともよろしく、ご指導、ご鞭撻の程をお願いいたします。

定の現千葉労災病院百瀬剛一名誉院長の並々ならぬご苦勞、粘り強い折衝があったことを伺いました。開院当時は7診療科病床二〇〇床をもって診療を開始しましたが、その後着実に診療体制の整備は進められ、医療用リニアック治療装置導入に伴う放射線棟、MR導入に伴うMR棟、平成6年度には患者アメニティ改善のための病棟部門中心の増改築が完成し、現在は12診療科、病床三〇〇床、常勤医40名となり、鹿島臨海工業地帯での勤労者医療のみならず鹿島地区の基幹病院として地域の人々の信頼を得て発展しております。診療科の医師は岡本昭二名誉教授のご推薦により北里大学より派遣されている皮膚科を除いてすべて千葉大学医学部、およびその関連大学医局(富山医科薬科

大学和漢診療部、東邦大学医学部佐倉病院)より各科の関連施設として派遣されており日頃からのご厚意、ご援助に厚く御礼申し上げます。さらに開院当時より茨城県在住の同窓殊に筑波大学臨床医学系及びその関連の病院の方々より貴重なご助言、ご援助をいただいていることにも厚く御礼申し上げます。

私は、昭和35年千葉大学医学部を卒業し昭和36年第一内科に入局し三輪清三教

全国保健所長会会長

船橋保健所長 小倉 敬一 (昭36卒)



昨年10月15日に東京で開催された第54回全国保健所長会総会の席上で、図らずも全国保健所長会会長に選出されました。

折しも昨年は4月に戦後50年間続いた保健所法に代わり、地域保健法が全面施行され、公衆衛生行政の体制に會てない大きな変革がみられた年です。地域保健法に基づき、世界的にも類

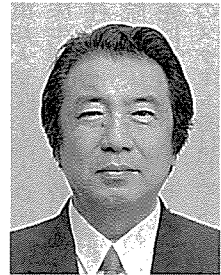
授に師事いたしました。関隆先生の指導のもと抗結核剤の副作用の発生機序、自律神経作用薬の薬理など臨床薬理の研究のさなか第一内科を掃るがす幾つかの事件や学園紛争があり大学を去りました。川崎製鉄千葉病院を経て昭和56年鹿島労働病院開院と同時に坂巻皓院長(当時)と共に赴任致しました。まったくゼロからのスタートであり一枚の伝票作成から始めた貴重な経験でした。

今、医療は医療ビッグバンともいわれる大変革の時でありさらに労災病院は政策医療として課せられたいくつかの難問も抱えております。決して順風とはいえない状況ですが、訪れた方々に最高にして最良の医療を提供するという開院時の初志を忘れず、より良く充実した病院を目指して努力したいと思っております。同窓の皆様引き続きのご支援をお願い致します。

をみない誇るべきシステムであった全国の保健所網は大巾に再編成されその数も八四五から七〇六へと減少し、また組織機構も時代の要請を受け福祉事務所との合併が多くの県で見られるなど、ドラスチックな変化がおこりこの混乱はまだ2、3年続くものと思われる。このような重大な時期に会長に選ばれた全国の保健所の舵取りをまかせられたことは、光栄であると共にその責任は極めて大きく身のひきしまる思いです。21世紀は予防医学の時代

千葉県医師会

会長 藤森 宗徳 (昭37卒)



去る3月8日に開催された千葉県医師会代議員会に於て第20代千葉県医師会会長に選出されました。そのおりは本学出身の代議員の方々にご支援いただきました。ここに改めてお礼申し上げます。

前任の渡辺会長(昭和27年卒)は、名会長として10年にわたり会をリードして数々の功績を上げられております。それに比べて若輩未熟な小生としてははなはだ不安ですが、他の役員にご協力いただいて会員の付託に応えたいと思っております。

れて財政抑制が進められております。

昨年9月改定の保険本人窓口負担増、薬剤費窓口二重負担等により受診抑制が現れている中で今回4月のマイナス改定により、今後医療機関の経営は一段と厳しくなると思われます。今後は病院と診療所が、勤務医と開業医が団結していかないと、欧米の一部に出てきているように医療が全て立ち行かない状況になる恐れが出てきます。

千葉県の財政も厳しい状態にあり、その影響が千葉県医師会財政にも及んでおります。一方都道府県中心であった地域医療保健活動が市町村医師会に移ってきております。このように社会的にも組織的にも県医師会の在り方が大きく変わらなくてはならない時期での任務ははなはだ難しいと思われまふ。

るのほな同窓会会員の皆様には、県内外にかかわらずご指導ご支援をお願い致します。



懐かしの写真集

— その一 —

左の写真は報徳千葉診療所長佐藤羊一先生(昭22卒)が、編集部にご送付下さいました昭和22または23年頃の大学祭での写真です。本掲載後、御返却致します。



附属図書館亥鼻分館の展示について

千葉大学附属図書館亥鼻分館の新施設が一九九六年に竣工し、同年11月に記念式典が行われ、開館の運びとなった。ゆたかに、しかも機能的に設計された建築と内部施設が人目を集めたのは勿論だが、新鮮な興味を与えたのは、分館が所蔵する解体新書や、亥鼻キャンパスの古い写真などの展示物であった。

この企画は新館の予算要求の段階から構想されたもので、図書館機能の一つと位置づけた博物館的役割の一環をなす。目的は、教育・研究を側面から支援することであり、ユーザーが図書館活動に能動的に参加することにも大きな意義がある。企画のまとめには、嶋田裕分館長と、展示にかかわる小委員会(当時の委員長、西村和子真菌医学研究センター教授)が当たり、私は前分館長としてつなぎの役割を務めた。

内容としては、多くの層が興味をもつような教育・研究上の話題、亥鼻キャンパスから生まれた誇るべき業績、一時代を切り開いた革新的研究の成果と記録、分館が所蔵する古医書や蘭

宮武昌一郎前助教授
〈MRIはどうして写るのか〉
CTと共に革命的な診断法であることはいままでもない。この方法の基礎となる核磁気共鳴(NMR)をやさしく解説している。水素など奇数の陽子(または中性子)をもつ原子は小磁石の性質をもち、強い磁場におかれると一斉に一定方向を向く。磁場をとくと初めのランダム状態に移り、そのとき電波を発するが、その周波数と位相は原子の置かれた状態で異なる。これを画像化するのである。

〈亥鼻台をめぐる歴史〉
一世紀を超える歴史をもつ亥鼻キャンパスの変遷が簡略に解説されている。写真資料には故三輪徳寛教授、故柏戸留吉教授の臨床講義の光景も含まれ、すでに一世紀近くを経ながら鮮明であり、注目される。千葉県文書館よりいくつかについてコピー許可の要請があった。(担当)橋正道名誉教授、資料提供、村山智名誉教授

〈免疫のしくみ〉
免疫系が自己と非自己をいかに区別するかを中心に、主役を演ずる細胞と分子を紹介しつつ、美しい図版を添えて仕組みがコンパクトに解説されている。免疫応答における中核分子であるMHC(主要組織適合抗原複合体)の働きの分子レベルでの説明はわかりやすく、本展示で概要をつかんでから成書に入ることを薦めたい。エイズ、アレルギー、移植にも話が及ぶ。(担当)谷口克教授、斎藤隆教授

免疫系が自己と非自己をいかに区別するかを中心に、主役を演ずる細胞と分子を紹介しつつ、美しい図版を添えて仕組みがコンパクトに解説されている。免疫応答における中核分子であるMHC(主要組織適合抗原複合体)の働きの分子レベルでの説明はわかりやすく、本展示で概要をつかんでから成書に入ることを薦めたい。エイズ、アレルギー、移植にも話が及ぶ。(担当)谷口克教授、斎藤隆教授

病理像と共に、歴史的意義が解説された。疾患モデルを提供し、また腎炎発生におけるアレルギー機序関与の可能性を初めて説明した。その後、目ざましい発展、本学の免疫学派はこの研究をルーツとしている。(担当)近藤洋一郎教授

〈江戸医学の眼科〉
本分館は有名な解体新書を含む東洋医学・蘭学古書コレクション(約五五〇〇冊)をもつ。そのうち、眼科に重点を置いて解体新書(二七四)、泰西眼科全書(一七九九)などが展示・解説された。開館時にこの解体新書の展示が新聞で紹介され、多くの一般見学者が分館を訪れた。(担当)安達恵美子教授、千葉彌幸

永吉の眼科病院院長
〈ナイチンゲールの看護覚え書〉
看護を女性の天職として確立したナイチンゲールは3種類の覚え書きを残した。欧米で世に広まったのは一般向けの著書であったが、我が国には正統的な看護婦向けのものが伝わり教育に用いられた。他の一つ、労働者向けのものを加えた3種の原書が展示され、これの世界各国への伝搬、看護教育の普及が解説された。(担当)薄井担子看護学

部前教授。
海外との交流が盛んになるにつれ、新しい感染症が輸入され話題になっている。カビ(真菌)による輸入内臓真菌症を紹介し、医療従事者の注意を喚起している。(担当)亀井克彦 真菌医学研究センター助教授
〈DNAの二重らせん構造ノベル賞論文シリーズ一〉
学生の啓蒙用であり、ワトソンとクリックの研究と過程が紹介されている。大望を抱く若い二人の写真には次世代の人を啓蒙する力と輝きがある。(担当)橋正道名誉教授

部前教授。
海外との交流が盛んになるにつれ、新しい感染症が輸入され話題になっている。カビ(真菌)による輸入内臓真菌症を紹介し、医療従事者の注意を喚起している。(担当)亀井克彦 真菌医学研究センター助教授

〈DNAの二重らせん構造ノベル賞論文シリーズ一〉
学生の啓蒙用であり、ワトソンとクリックの研究と過程が紹介されている。大望を抱く若い二人の写真には次世代の人を啓蒙する力と輝きがある。(担当)橋正道名誉教授

〈ポンペー日本近代医学の恩人〉
オランダの軍医ポンペは28才で来日(一八五七)、幕府の医官、松本良順(佐倉順天堂、佐藤尚中の実子)など多くの優れた人材を育成した。その教育は系統的であり、基礎科目を重視した。また長崎に日本最初の近代的教育病院を設立した。眼科の参考書として用いたJesse著の眼科図譜(一八五六)を、後にポンペはサインをして松本良順に贈った。本分館はその本を所蔵し、これが展示された。(担当)安達恵美子教授、千葉彌幸博士

授千葉彌幸博士。
日本の眼科の歴史、その

一馬島流眼科秘伝書
本邦では早くより眼科は特殊技術として専門分化していた。また技法は秘伝であり公開されなかった。諸派があったが、最大の流派馬島流の秘伝書のうち、図譜を中心に展示された。

〈同右、その二 眼科諸流派と秘伝書〉
室町時代以降、眼科の諸流派は百近くあったが、そのいくつか、青木流、柚木流などの秘伝書が展示されている。(担当)安達恵美子教授、千葉彌幸博士

幕末の頃、佐倉順天堂は東日本で西洋医学が学べる唯一の場所であり、西の長崎、東の佐倉といわれた。この大きな歴史的役割の原動力は、藩主堀田正睦(マサヨシ)による大胆な藩政改革(一八三三)とそれを支えた優秀な家臣の力であった。順天堂より寄贈された当時のオランダ語辞典を添えて解説されている。(担当)石出猛史博士

「日本の母子健康手帳」変遷と歴史的役割
昭和17年に厚生省の決断で、妊娠婦手帳が発足した。昭和25年に母子手帳、昭和45年に母子健康手帳と役割を伸ばして名称も変わったが、妊娠、出産、育児の啓

蒙に大きな役割を果たした。保存されていた貴重な古い手帳の現物を添えて解説されている。優れた行政措置の大きな効果が実感される。(担当)君塚五郎看護学部教授

〈大腸菌O157のやさしい細菌学〉
たかが大腸菌ではなく、怖い病原菌であるO157について、医療関係者の常識を確認する解説であり、問答形式でまとめられている。細菌の性質から始まり、2回の展示で、感染症の症状と予防方法までカバーされている。(担当)野田公俊教授

以上がすでに終了のものも含めての内容であるが、力作も多いので亥鼻台に来訪のさいに御一覽をお願いしたい。この企画の問題点は、労力、費用の両面で、図書館には余裕がなく、共に出展者の負担に頼るという基盤の弱さである。強化策を考えてゆかねばならない。経済に追い回される社会にあって、せめて大学はそれを超える誇りを持って欲しい。図書館のささやかな企画が、その一助になればと望むものである。

橋正道(東大昭29卒、名誉教授、前亥鼻分館長)

第25回

日本医学会総会について

日本医学会総会は、次回第25回を迎え、一九九九年に東京で開催されることが決定しており、現在その準備を進めているところです。

日本医学会総会は明治35年に東京にて第1回が開催されて以来4年毎に開催され、約一〇〇年の歴史があります。第25回は正確には一〇〇年には少し満たないものの、20世紀最後の記念すべき大会となります。主務機関としては、千葉大学医学部を含め東京大学医学部、東京医科歯科大学医学部、慶応義塾大学医学部、東京慈恵会医科大学、東京女子医科大学の計6校となっております。組織委員会構成は左記のようになっております。

- 会 頭 高久 史磨
- (自治医科大学学長)
- 副会頭 伊藤 正男
- (日本学術会議会長)
- 副会頭 吉岡 守正
- (東京女子医科大学学長)
- 副会頭 森岡 恭雄
- (日本医師会副会長)
- 準備委員長 矢崎 義雄
- (東京大学医学部長)
- 総務委員長 佐藤 達夫
- (東京医科歯科大学学部長)

はなく広く人々の連帯の上
に成り立っていることを再
認識することも重要と考え
て上記のようなテーマとし
ました。

- 学術委員長 廣川 信隆
- (東京大学医学部教授)
- 広報委員長 猿田 亨男
- (慶応義塾大学医学部長)
- 登録委員長 酒井 紀
- (東京慈恵会医科大学教授)
- 記録委員長 松下 正明
- (東京大学医学部教授)
- 式典委員長 安達恵美子
- (千葉大学医学部教授)

また、会期・および開催
地は次のようになっており
ます。

- (1)学術講演
会 期 一九九九年(平
成11年) 4月2日(金)・
3日(土)・4日(日)
- 開催地 東京国際フォー
ラム 東京都千代田区
丸の内
- (2)展示・医学博覧会
会 期 一九九九年(平
成11年) 3月30日(火)
4月8日(木)
- 開催地 東京国際展示場
東京都江東区有明

第25回日本医学会総会のメ
インテーマは、「社会と
もに歩む医学」開かれた医
療の世紀へ」となってお
ります。医学の進歩という
従来からの基本理念を維持
しつつ、医療は医師だけで

テーマ「お年寄りのめんど
うは誰がみるか」

- 座長・鈴木 弘祐
- (千葉県医師会理事)
- 中村 栄子
- (千葉県看護婦協会)

演者 「医療」

- 秋葉 哲生
- (伝統医学研究会あき
ば病院)
- 「行政」
- 野口 美和子
- (鎌ヶ谷市高齢者福祉
課介護支援係)

「家族」

- 永島 光枝 氏
- (ボケ老人をかかえる会)

特別講演

- 座長・千葉大学医学部
卒後研修部教授
若新 政史
- 「死の臨床・生命の尊厳」
千葉大学名誉教授
磯野 可一

現在、鋭意準備を進めてお
りますが、先生方におかれ
ましては、今後ともよろしく
ご協力をお願い申し上げます。
(千葉大学医学部眼科・第
25回日本医学会総会式典委
員会幹事、溝田 淳)



名尾良憲先生の

米寿を祝う会



り、井出源四郎(元千葉大
学長)先生、加納六郎(元
東京医科歯科大学学長)先生
始め、竹本忠良先生、奥田
邦雄先生、細田四郎先生と
次々に挨拶を給わった。

次いで梅田典嗣(国立国
際医療センター病院長)先
生より名尾先生に記念品を
贈呈しました。又、片野て
い子(都立豊島病院代表)

様、山下克子(東京女子医
大代表)様、青木マサエ
(個人代表)様の3名より、
大きな美しい花束を贈呈さ
れ、一瞬名尾先生の顔がな
ごまれました。

次いで名尾良憲先生から
心のこもる謝辞がありました。
乾杯は名尾先生のクラス
メイトであり、元千葉労災
病院院長である百瀬剛一先生
の予定でしたが、突然の急
用により欠席となり、急遽
代理として、私貫洞一夫
(東京のほな会副会長)
が努める事となり、大いに
恐縮感激で努めました。

そして名尾先生の強い要
望により、茂又眞祐(千葉
寮歌振興会長)先生、及び
萩原彌四郎(前城西大学学
長の司会により、「ミニ

寮歌祭」が始まり、又三葉
病院薬剤部長の南部直樹先
生の応援もあって、当日参
加者の多数による寮歌祭が
盛り上がりました。

従って、久しぶりに遠方
より参加した方々も直ぐ和
やかとなり、会も大いに盛
り上がりました。

最後に町井の彰(前都立
豊島病院長)先生の閉会の
辞により終わりました。名
残惜しみつつ散会しました
が、屢々名尾先生の米寿の
会の事が各所に於いて話題
となるにおよんで、今回
報に報告する次第です。

(貫洞 一夫)

高見沢名誉教授(昭27卒)
年齢別テニス選手権
で日本一に

平成9年10月2日より3
日間名古屋市東山公園テニ
スセンターで開催された明
治生命第59回日本ブランド
シニアテニス選手権大会に
於いて、高見沢裕吉名誉教
授は、70才以上74才迄の男
子ダブルスに関根力氏とく
み出場し、見事優勝した。

高見沢名誉教授は、平成
5年から千葉県テニス協会
会長として活躍中である。

各地の
るのはな会
だより

東京のるのはな会

るのはな会支部としては最大の規模を誇る東京のるのはな会、会員数二二〇〇余名、東京は医学部が多いので教授、助教授、講師の数は数えきれぬ程いる。会員の懇親、患者紹介、卒後研修に役立つよう平成9年6月に「Inohana Tokyo」創刊号を上梓した。小杉秀雄（24年卒）氏の豊富なパリジェンヌのカラー写真を

東京のるのはな会 小杉秀雄代
広報部長 村瀬 靖（昭30卒）一九九七、二、二二

君津木更津のるのはな会
同窓会



平成9年2月18日、法医学教室 木内 寛教授をお招きして盛大に行われました。「日常診療における法医学」の演題で講演していただき、異常死の取り扱いなど死体検案書の書き方を詳しく講義していただきました。尚、当日当会員の横須賀孝先生が急逝されたことが突然報告され会員一同黙とうをささげ、先生のご冥福をお祈りいたしました。その後、記念撮影、懇親会とつぎ薬丸先生の乾杯の音頭で会が始まり、和気合々の中で、親睦をはからせて

いただきました。出席者は35名、当地区には一〇六名の会員がおりますので、約3割の会員諸氏が、出席していただきましたことになりす。

二次会も、10数名参加さ

群馬のるのはな会



平成9年11月15日、恒例のるのはな会群馬支部の総会を前橋市内マキューリホテルで開催した。沖 真澄（22）会長の開会の挨拶に始まり、会務・会計報告いずれも承認された。6月に阿部一郎（18）先生逝去され、会員数67名であること、椿山荘で行われた9年度るのはな同窓会総会の決議事項について報

れ、皆さん午前様になられ、帰宅されるほどの盛り上がりでした。教授の「カラオケ」もきかせていただき、全員いたく感謝しておりました。（昭40 森 博通）

告があった。前回まで欠かさず元気で出席された亀井清安（10）先生、北村英吾（12）先生が体調を崩されて欠席の御返事であり、このおふたり以外、昭和15年卒以前の長老会員にも激励の寄せ書きを送りたいと提案があり皆の賛同を得た。今年も井出源四郎（昭15）はな同窓会会長に御講演をお願いしたが、講演に先だつて独りの若い女性を紹介された。彼女は大連医科大学の学生で10月7日から文部省の奨学大学院生として、群馬大薬理学教室に留学している包建軍さんで井出先生が前橋に来られるなら是非同席したいという希望なので同伴してきたがよろしいかとのことでしたので一同熱烈歓迎の拍手で迎えた。講演は大学の現況報告にはるのはな随想だけでなく論説も書くことになった。行革の波が医学部にも押寄せて、附属病院民営化の話も出ていること。「真核微

生物研究センター」が解体させられたが「真菌医学研究センター」として再生発足した。るのはな同窓会賞の学術賞・功労賞には若手だけでなく、お年寄りも推薦したい。今年退官した清水文七、佐藤研一、高橋英世、山口豊の四教授の紹介があった。

次に今年最も感激した話として、福島県郡山市の奥羽大学歯学部が主管の身障者の歯科に口腔学会で講演されたことを話された。身障者と言えは目が見えない、声が出せない、手足が不自由であるがそれ以上の身障者の例として昨年は罹患者で歌人の明石海人が天刑を天啓と悟ったところに医の原点を説かれたが、本年は9月6日に逝去されたマザーテレサを執拗に追いかけて彼女の記録映画を作成した千葉映画監督の感動を述べられた「マザー」の背中に瘤があるが、カメラがこの瘤に吸いとられる思いを何度もした、瘤の中に祈りが込められているからだと思つた。マザーの手は農夫や労働者の手のように太くたくましい、まさに労働に奉仕する手である。表情そして顔の皺は苦悩と歓喜の彫刻だ、口元の微笑みは絶えることが無い、まさに愛

の結晶である。この世で最も神に近い人の映像と思つた。マザーの死は今日の世の中で世界中の損失であつたと思う。井出先生の感動が我々にもひしひしと伝わってくるお話であつた。

記念写真撮影後懇親会に移った。若手からは長老の話には大変勇気づけられるし、経験豊富で有益な話を聞くことが出来、是非毎年出席したいということであつた。懇親会中に色紙が廻り、亀井清安（10）、野澤嘉博（11）、北村英吾（12）、星野真徳（13）、北川道安（15）、鈴木不二夫（15）各先生宛の寄せ書きをした。最後に根本幸一（29）先生の二尺一寸の尺八演奏と江差追分が披露され、また来年の再会を約して散会した。写真説明 前列左から糸井猛彦（22）、赤松弘光（19）、田中敬明（12）、井出源四郎（19）、長町幸雄（特別会員群馬大外教授）沖真澄（22）平方義人（19）中列左から 包建軍 小林けい子（50）保阪亜莉沙（48）山口隆久（25）金井朝忠（20）大塚功（27）中田益允（35）後列左から黒岩璋光（37）長谷川透（56）小林道生（48）西村忠雄（32）

た諸先生より丁重なる御礼状を戴き、るのはな会を懐かしむお気持ちの痛いほど感じられました。なお、野澤先生の奥様よりの歌を御披露させていただきます。卒寿すぎ学生時代を恋ひてをり

るのはな台の学舎 顕ち来て（西村忠雄 昭32）

人事移動（一面より）講師昇任 外科学第二 小出義雄（昭50）（外科二助手より）小兒外科 吉田英生（昭53）（小兒外助手より）生化学第一 日和佐隆樹（東大50）（生化二助手より）内科学第二 橋本尚武（昭55）（同助手より）他大学 松川 正明 昭和大学教授（消火器科）

次回四金会のお知らせ
平成10年11月25日午後5時30分より、千葉駅ビル5階ベリエールにて開催致します。個々に御連絡致しますが、是非奮って御参加下さい。会費は三〇〇〇円

クラス会

白 兎 会
(昭和17卒)



我々は繰り上げ卒業で昭和17年9月に卒業したので、本年9月で卒業後丁度55周年になった。さきに報告したように、我がクラスは「白兎会」と称し、毎年春に総会、秋に例会を開催し、更に数年に1回クラス誌「白兎」を発行してきたが、55周年を機会に、白兎会を解散し、慶弔等諸処の行事は中止することにした。今後は年1回位は有志によるクラス会を開催することにした。そこで、去る10月26日(日)に「ホテルサンガーデン千葉」で卒業55周年記念

二二会 (昭和22卒)

昭和22年卒業のクラス会は若月君の御盡力により毎年帝国ホテルで行われていたが、いつの頃から隔年に地方に出ることとなった。地方になるとその土地の会員が幹事としてお世話するのである。

平成9年は卒後50年という節目に当たるので会員のアンケートをもとに伊東温泉で行うこととなり、幹事は貫洞君と新田が当たることとなった。平成9年7月19、20日に伊東温泉は「いづみ荘」で行われた。玄関に「畫中有天」の額が掲げてあったが、一步中に入ると正に華麗な旅荘であった。

当日夕、次々に集まった旧友たちはお互いの健康を喜び合い、思わず手を握り合うのである。参加者は6組の夫妻12名、会員13名、故人となった会員の夫人2名の計27名であった。北は北海道札幌から三橋君、南は九州福岡から竹内君といっ

念の会を開催し、白兎会としては千葉市での開催はこれが最後とした。残念なことには、よる年波で体調のよくない者が多くなり、出席者は級友8名、亡くなっ

た抜がりである。豊富な湯にゆっくりつかり宴会に入る。森永宗雄君の訃音が報ぜられ一同愕然とし遙かに冥福を祈る。いずみ荘葉貫洞夫人の御実家であり、何かと御配慮、おもてなしを受けた。そのお計らいで宴席に江戸情緒豊かな踊りと、卒後50年を祝っての獅子舞が披露された。やがて席も打ち解け大いに談笑したが、その間、三橋君から鴻巣智也君が病臥しているとの報告があった。席を改め二次会が持たれたが、恒例の旧制高校寮歌を歌い合うのである。古稀を過ぎた人間とは思えない元気に夫人達は嘩然とした様子であった。つい時の過ぎるのも忘れるのである。

翌日は朝粥を済ませバスに乗り込み伊東近郊に出かけた。木下左太郎記念館(医人であり多彩な文豪家)、ガラス工芸美術館(ガレ、ラリック、ドームの作品あり)を廻り、書はそばで手鼓を打つ。更に城ヶ崎海岸での息吹きを存分に吸い帰

た級友の奥様方4名の計12名という少人数であった。それでも3時間ばかりなごやかに楽しく語り合うことができた。
写真は、前列左から吉江、

路につく。
来年はまた元気で合おうの約束をし、一同熱海に向って宿を離れた。

出席者 伴賀多朗夫妻、居初良雄、石橋文太、今井力夫妻、沖真澄、加瀬幸雄、笹川猛、神山英明、貫洞一夫夫妻、清水健三、竹内辰五郎、内藤徹郎夫妻、新田実男夫妻、信藤羊一、前田実、丸山卓治夫妻、三橋公平、茂又眞祐、鷺田一博、有益安子、中川正子
(新田実男)



木村夫人、浦部夫人、水間大村、数馬夫人、橋爪夫人、後列左から浦田、西沢、藤村、藤江、小林清、である。
(水間正冬)

二七会 古稀旅行



◎62年(昭37)、卒業後10年目に第一回のクラス会をして以来何回か開催したが、◎72年(昭47)以後は毎年欠かさず行っている。この数年は年2回行い、春は宴会、秋は旅行という具合である。同伴の夫人も10人を越えることも珍しくはない。今回の台湾旅行では、莊昭徳君が1人で頑張ってくれた。莊君は台中市の出身で、台北市大予科より千葉大医学部に來られた。旅行中一晩、同君の中学時代の友人が2人來られて我々と食事を囲み、昔話に興じた。この友人達の力を借りて、莊君は通常では味わえぬ料理や貴酒のサービスを

三五会 (昭和35卒)

本年度のクラス会は、平成9年3月7日、茨城県の長谷川鎮雄、佐藤重明が幹事となり、成田空港近くの日航成田ホテルで開催され、26名と2未亡人の参加を得た。来年は阪信が幹事となり埼玉で、また二〇〇〇年は卒業後40年にあたるので千葉で盛大に催すことになった。
(嶋田 裕)



してくれたものと思う。クラスメイト9人、奥方5人の一行は大満足であった。観光は台北市内とバスを使った日帰り旅行を2日した。一つは台北市より西南25軒、淡水河の上流に位置した三峡の祖師廟を見学した。典型的な道教寺院の造りである。市内にある孔子廟や保安宮と同様であった。もう一つの旅行は、台北市の東北30軒の海岸に展開する奇景を訪ねた。風波の浸蝕により海岸の岩石が鳥帽子状、マリモ状にみえる。野柳という景勝地である。その帰りに、細い山みちをバスであがって、テレサ・テンのお墓を見て来た。話のたねになりそうである。
(小沢昭司)

春秋会・春の例会

(昭和31年卒開業医の会)

医研での指導や対癌協会、予防衛生協会にて肺癌検診の最終チェックなど、そして、遠藤君は残務整理と学会などで本年一杯多忙であり、また、九段坂病院顧問として勤務とのことであった。両君の今後の健闘を祈る。

われわれ開業医は、卒後

四十二年卒 三十周年記念クラス会

10年前後に開業しているの
で、実社会に出るのが普通
の会社員に比べ15年近く遅
れている。世間の60才定年
は75才位に相当するので、
まだまだ元気で頑張りたい
ものである。当日の参加者
両君の他、滝沢明祐、徳山
輝男、蟹沢成好、山口慶三
辻輝蔵、川上秀一、森碧、
神尾鋭、西原源太郎、海老
原雄一(早退)、小野清四
郎の12名。

(小野清四郎)



昭和42年(一九六七年)
に卒業した我々も、卒後30

連絡しましたところ、当日
は暑い日でありましたが卒

業生の過半数に当たる53名
の参加を得ました。卒後初
参加の方もあり、あまりに
変わり果てた姿に「あなた
は誰ですか?」などの会話
もありました。全員に近況
報告をしていただき、また
たく間に4時間が過ぎまし
た。新たな仕事にチャレン
ジをしているもの、体力減
退を嘆くもの、体力増強を
うたうものなど様々でした。
孫が出来、名実ともにオジ
ジ、オババになったもの、
容貌だけ見れば、恩師が来
られたのかと思うなど30年
間の変化の個体差も、あら
かじめプログラムされた遺
伝子のなせるワザと驚きつ
つ旧交を温めました。しか
し話が終わる頃にはやはり
同級生の印象は、ほぼ変わ
らず、昔のアイツにもどろ
30年のタイムスリップを楽
しみました。一部、入学、
卒業年次の異なる方も居り
ましたが同級生としての語
らいを分かち合いました。

年を迎え平
成9年8月
31日に品川
のホテル・
メリディア
ン・パシフィ
ック東京にて
三十周年記
念クラス会
を開催しま
した。守屋
秀繁(千葉
大学 整形
外科)と伊
藤達雄(東
京女子医科
大学 整形
外科)が幹
事となり、
連絡しましたところ、当日
は暑い日でありましたが卒

出席された方は健康にも
恵まれ、各界で活躍してお
りますが、卒後に他界され
ました大島徳治、Paul Craver、金木良夫、
小泉宏、野村庸一の諸氏のご
冥福を祈り、また近い時
期の再会を約して散会いた
しました。

(追記)

この会の途上にて30周年
記念誌を発刊することが決
まり、伊佐治尚文君が編集
長となり、また千代に続く
42卒生をかけて「ちよに会
と命名することになりました。
この場を借りまして、
42卒の皆様で、まだ原稿執
筆に着手されていない方は
急いで下さるようお願い致
します。

(出席者) 伊佐治尚文
板谷喬起 Nsg. Si Tam
伊藤達雄 太田東吾
遠藤保利 笠貫 宏
大沼直躬 笠貫 宏
片倉 透 勝俣剛志
川島庄平 冠本佐藤 敦子
倉田矩正 川越松田 和子
河野 泉 小林紘一
小林茂雄 小柳楊朝明
更科廣實 関(大河平)隆郎
鈴木一郎 関(青木三千代
高崎 健 高橋 稔
高部吉庸 高橋弘昭
田口 元 瀧野勝彦
田中弘一 中島克己
中村謙介 西牟田敏之

能勢忠男 能勢(川井)晴美
服部孝道 忍頂寺紀彰
林 龍哉 原 征洋
平賀一陽 林(山田)益子
藤沢武彦 福地(深沢)京子
藤本章 星野 豊

平成9年度 卒業生進路

〔千葉大一内科〕稲田麻里
笹島圭太、須藤研太郎(二
内科) 秋川由紀子、大矢佳
寛、田中麻美、川勝千桂子、
武内正博、前澤善朗、大森
佳子、山脇明子(三内科)
池田篤史、大塚健太郎、沖
野晋一(一外科) 木下宏文、
久保木知、櫻井学、篠崎秀
博、松浦馨(二外科) 井上
雅仁(整形外科) 荻野修平、
鴨田博人、中村陽子、宮坂
健(産婦人科) 藤原佳子
(眼科) 植村明弘、窪田伸
夫、谷合真理子、星野章子
(皮膚科) 石井啓子、隅田
めぐみ、溝口雅子(泌尿器
科) 井上淳(耳鼻科) 磯山
恭子、熊原恵一郎、佐藤由
美子、下岡恭子(小児科)
須藤(並木)扶佐代(精神科)
吉野美幸、大上和彦、大掛
真太郎、岡村齊恵、中居香
永富めぐみ、野々村司、水
野俊誠(麻酔科) 斎藤淳子
(脳神経外科) WANG
KUOTING(呼吸器内科)
瀬戸武志、村田研吾、吉崎

本多陸人 宮内倉之介
守屋秀繁 宮坂(仲川)斎
森田 清 森田百瀬 喜夢子
矢崎 浩 龍(劉) 浩志
渡辺道典
(伊藤達雄)

敦子(神経内科) 荒木則幸
小松幹一郎、大和田暁之、
平野成樹、米津彰一(小児
外科) 照井慶太(救急部)
新田正和(東大内科) 岡崎
由希子、堀越桃子、川井誠
山本夏代(脳神経外科) 安
達忍(整形外科) 落倉信靖
藤井朋子(耳鼻科) 遠間真
希子、藤城芳徳(外科) 小
島徹(東医歯大三内科) 田
代宏徳(東京女医大日本心
臓血圧研) 鈴木正人(昭和
大附属病院産婦人科) 杉藤
祐美(国立国府台病院) 小
川房子(国立国際医療セン
ター麻酔科) 燕昇司奈保子
(内科) 菅原武明(武蔵野
赤十字病院) 今章倍敏行
(都立墨東病院) 河野元昭
(千葉西総合病院) 福元昭
雄(沖縄アメリカ海軍病院
上田亮(未定) 青木五省、
本田昌弘、李光浩、鈴木建
則(千葉大学院医学研究
科衛生学) 石川節



るの は な 随 想 (十二)

昭和初期の思い出

大 倉 安 衛 (昭8卒)

この度奥井前教授のおす
めがあったので昭和初期
の思い出の一部(既に昭和
54年度の医局第10号に述
べてあるので重複を省みず)
を述べて責を果たすことと
した。私は千葉医大を昭和
8年卒業。直ちに第一外科
(高橋外科)に入局、入局
者4名。当時は他の大学、
専門学校からの入局者は殆
ど皆無だったので、医局員
は20名前後、現在のように
関連病院はないので、出張
して収入を得ることは無か
った。そういう状況の中でた
また福島市の大原病院長
大原先生(野兎病の世界的
権威者)がアメリカからの
招聘によって3ヶ月間留守
になる。その間の留守番
を依頼され、小生選ばれ出
張した。外科には2名の外
科医が居ったので、手術以
外には用事がなく退屈で
困ったことが思い出される。
それにも拘らず破格の待遇
を受けたことも記憶に残る。
千葉医専が大学に昇格した
のが大正12年。千葉医専の
外郭団体である同窓会は、
るの は な 会 と 称 した。この

るの は な 会 と 大 学 同 窓 会 の
合併問題がこじれた。大
学同窓会の理事の仕事をして
いる児玉さんが高橋外科の
教室員であることから、学
長である高橋先生は教授会
に於て苦しい立場に立たさ
れた模様である。高橋先生
は昭和15年11月学長の職を
去られると共に教授退官の
止むなきに至った(これに
は複雑な事情があるやにき
いている)。

高橋先生の後任には教室
は一致して鈴木講師(故国
立千葉病院名誉院長)の教
授昇任を熱願し、1ヶ月以
上に亘って運動を展開した。
その最中に、佐藤正男君
(昭和7年千葉医大卒、伊
東市の佐藤病院の後継者)
と私が鈴木先生のお部屋に
呼ばれた。鈴木先生曰く、
今佐藤教授が来られて、
「鈴木君大変なことになっ
たよ。第一外科が整形外科
になるらしいよ。」と知ら
せて下さった由。因みに、
皮膚科の佐藤教授と衛生の
松村教授は第一外科に特別
の御好意を寄せて居られた。
直ちに医局員全員医局に集

合。協議の結果、小池学長
と瀬尾教授に真相を糾すこ
とに決定した。当時は総合
大学以外では整形外科が独
立していたのは新潟医大だ
けだったと思う。地方の大
学では整形外科単独では立
ち行かなかった時代だった
ので、早速新潟医大に調査
班を出して調査した(調査
に行かれた方々は御記憶と
思う)。これ等の資料をも
とに小池学長と瀬尾教授に
教官食堂にて面会が行われ
た。現在も私の脳裏に鮮明
に残っていることは、鈴木
先生が「瀬尾先生、私は今
まで先生を尊敬していまし
たがもう我慢が出来ない。
先生整形外科の件は撤回し
て下さい。我々はあらゆる
方法でせまるからその覚悟
でいて欲しい。」という意
味のことを言われたこと
である。

第一外科の存亡がかかっ
ていたので、責任者として
おさへにおさえていた感情
の爆発のあったことはぬべ
なるかなと思われる。翌日
か数日後だったか、鈴木先
生と私が瀬尾教授のお部屋
に呼ばれた。その時の会話
ははっきり記憶にないが、
瀬尾先生が、「鈴木君、君
は正直な男だからなあ。と、
鈴木先生を誉め、教官食堂
でのとげとげしい雰囲気は

なかったもので、瀬尾先生の
お気持ちは変わりつつある
との感触を得た。又、学長
と瀬尾教授が、内定の取り
止めに行かれたとの噂を漏
れ聞いて、ほっとした思い
出がある。

小池学長は竹を割ったよ
うな人柄で、人を疑うこと
のない立派なお人柄であっ
た。解剖学の教授で臨床方
面のことは不案内であった
ので、瀬尾教授の説明を鵜
呑みにされたのだと思う。

かようにして、歴史ある
第一外科は存続することに
なった。当時の教授陣の構
成、並びに教授会の空気か
らして、我々の悲願は達せ
られることなく河合教授が
発令された。松村教授と佐

藤教授のお二人が佐藤君と
私を牧野宅の一室に招き、
「鈴木君は責任をもって助
教授にする。君達は今まで
のことは水に流して、河合
教授を助けて第一外科のた
めに尽力してほしい。」と
言われた。当時の先生方は
皆故人となられ、当時を知
る人は恐らく私一人となっ
たので、歴史の一コマとし
て書き残すこととした。

今や時代は大きく変わって
母校の出身者が教授になる
時代になった。まことに喜
ばしい現象であるが、それ
だけに教授たるもの、責任
は重いといわねばならない。
益々自重されて千葉大学の
発展に御尽力されることを
願って止まない。

平成10年度 医学部入学者氏名

青山 敬介 赤木龍一郎
有川 俊輔 家 研也
生富 公康 池田 憲政
市原広太郎 伊藤 公乃
今村 有佑 薄井 正俊
内川裕美子 内野 康志
宇野 秀彦 遠藤 悟史
大熊 加恵 大西俊一郎
大日向祥子 岡村 愛子
岡山 大 小笠原定久
小田 靖典 片桐 明
加藤 啓 金川 裕矢
亀崎 秀宏 菅野 勝義

平成10年度 大学院医学研究科入学者

〔細胞生物学〕 ムハマド・
ムジャヒド・カーン、高野
海哉〔環境変異学〕 齊効軍
干文新〔病原分子学〕 岩丸
祥史、斎藤高雄〔分子腫瘍
病理学〕 村井信一〔病態病
理学〕 鄭克非〔環境衛生学〕
渡辺美隆、石川節〔分子機
能制御学〕 張 彦、田中裕
子、須永泰弘〔発生生物学〕
古関庸子、村上宏子〔分子
生体機構学〕 周 静〔免
疫発生学〕 清水千織、鎌田
徹〔遺伝子制御学〕 ティ・
ハルタテイク〔医療情報学〕
後藤優子〔感染機構学〕 陳
梅〔病態生理学〕 新保泉
森居真史、菰田文武、野本
裕正、塚原常道、平井太、
伊藤龍、金晋年、秋池太郎、
奥川忠博、門野源一郎〔細
胞治療学〕 石塚保弘、福田
勝之、鈴木浩太郎、矢沢実

高橋 秀彰 高橋 龍平
滝嶋 葉月 田中 圭
田中 彩子 千田 明美
塚本 祥吉 坪井さやか
寺谷 俊康 中田 泰幸
中村 美輪 中村 祐介
長友 香苗 成毛 大輔
二階堂 香 西川 牧
西山 豪 野口 貴志
花北 俊哉 廣野誠一郎
福田 香織 藤川 陽

藤元 瞳 本田 桐
松本 悟志 松本 真輔
三島 有加 宮本雄一郎
宮山 友明 村田 健
森 昌玄 森田久美子
柳 大介 柳澤 大輔
山崎 博範 山下 未来
山本 憲子 山本 裕輝
吉田 暁子 吉田 雅樹
渡辺 未歩 渡部 好宏
渡部 恭大

生、祖山暁子、徳政敦子、
星本相浩、小泉正幸〔循環
病態学〕 孫可竹、小泉智三
鈴木将、松戸裕治、佐藤幹
生、桜田秀樹、行木瑞雄
〔器官病態学〕 土田智一、
曾川慶同、鹿島康薫、柴田
陽一、杉本克己〔消火器病
態学〕 阿久津泰典、川島太
一、齊藤明、近藤悟、中島
志彦〔運動機能学〕 村澤光
洋、中島新、渡辺光弘、内
海昌浩〔生殖機能学〕 碓井
宏和、小幡新太郎、川又靖
貴〔視覚病態学〕 忍足俊幸
佐藤栄男、李少敏、平野千
里子、横山曉子〔基質代謝
学〕 武田潮、吳京海、山本
克志〔後腹臓器機能学〕
石原順就、細井郁芳、一色
真透、阿波裕輔、木藤宏樹
小瀧隆英、今本敬、細木茂
関田信之、関山和弥、金水

英俊、中町裕(頭頸部機能学) 橘昌利、石井友季子(小児病態学) 栗原亜紀、小川恵美、大塚里子(精神機能病態学) 岡本英輝、久保田統(口腔機能学) 秋葉次野、山本誠、小野可苗、荒木大介、鈴木真紀、山本泰弘(神経機能統御学) 五十嵐琢司(神経機能病態学) 大木剛、鈴木淳也、吉川由利子(臓器不全病態学) 横張賢司(呼吸器機能学) 本橋新一郎、安福和弘(呼吸器病態学) 中村晃、坂尾誠郎、多田裕司(形態修復学) 力久直昭、齊藤聖子

第92回

医師国家試験成績

試験日 平成10年3月21日(土) 及び22日(日)

合格発表 平成10年4月22日(水)

受験者 90

合格者 85

合格率 94・四%

参考

国立

合格者 四、〇九六

合格率 九〇・五%

全国

合格者 七、八〇六

合格率 八九・六%

千葉県医師会

新役員

平成10年3月8日(日)開催された千葉県医師会代議員会に於いて、勇退した渡辺

武氏(昭27・5期10年)に代わり、選挙により藤森宗徳氏(昭37)が選任された。本学関係の役員は次の通り。(〇の中の数字は選任回数、最下段は出身地区医師会名を示す)

会長

藤森宗徳(昭37)①千葉

副会長

守屋秀繁(昭42)①大学

理事

荒川直人(昭29)②国立

三枝一雄(昭32)③君津

木下 昌昭(昭38)③千葉

井上雄之(金大昭39)市原

鈴木弘祐(日大昭39)鎌ヶ

谷

水野幸一(長大昭40)千葉

日本医師会代議員

川村純一(車25)⑤八日市

場

渡辺 武(昭27)⑥船橋

藤森宗徳(昭37)⑤千葉

他県医師会会長・副会長

山梨県医師会会長

溝部孝二(専27)②

静岡県医師会会長

勝呂 安(専20)②

埼玉県医師会副会長

鎌田昌弥(専25)①

千葉県市職員異動

ハビリテーションセンター施設長

長尾龍郎(昭40)(富山県

高志リハビリテーション

ン病院副院長より)

保健所長

小倉敬一(昭36)船橋(木

更津より)

堀部治男(日大昭35)木更

津(佐倉より)

内田佐太(東邦大昭37)

佐倉(茂原より)

衛生短期大学

内藤準哉(昭42)教授(国

立千葉病院院長より)

がんセンター

嶋田文之(昭37)医療局長

(医療局診療部長より)

渡辺一男(昭41)医療局診

療部長(消化器外科部

長より)

大里克信(昭46)脳神経外

科部長(主任医長より)

炭田正俊(昭53)内科主任

医長

永田松夫(昭53)外科主任

医長(医長より)

山本 宏(昭53)外科主任

医長(医長より)

野本靖史(昭60)肺外科医

長(千大附属病院助手

より)

田口 昇(昭60)麻酔科医

長(昇任)

熊谷匡也(昭62)内科医長

(国保成東病院医長より)

早田浩明(昭62)外科医長

(千大助手より)

井内俊彦(岡大昭63)脳外

科医長(国保成東病院

医長より)

湯浅譲治(平2)泌尿医長

(千大助手より)

矢野嘉政(平3)外科医長

(昇任)

こども病院

中村 明(昭48)小児科部

長(主任医長より)

工藤典代(阪大昭52)耳鼻

科主任 医長(医長より)

宇田川晃一(昭53)形成外

科主任医長(医長より)

田辺雄三(岐大昭53)小児

科主任 医長(医長より)

渡邊 梯(信州大平2)眼

科医長(千葉労災病院よ

り)

循環器病センター

龍野勝彦(昭42)センター

長(副センター長)

丹羽公一郎(昭51)小児科

主任医長(こども病院

より)

小龍 勝(昭53)脳外科主

任医長(国立習志野病

院より)

林田直樹(愛媛大昭54)外

科主任医長(千大助手

より)

杉森邦夫(昭60)麻酔科医

長(千大助手より)

松田信二(香大昭62)神経内

科医長(君津中央病院

より)

立野 滋(昭63)小児科医

長(千大より)

栗生田輝(平1)内科医長

(八日市場市民総合病

院より)

救急医療センター

茂木健司(昭63)外科医長

(千大より)

酒井芳昭(岡大平2)内科

医長(千葉市立病院医

長より)

大石博通(平3)脳外医長

(川鉄千葉病院より)

一般県立病院

東金病院

平井愛山(昭50)院長(千

大二内科講師より)

香川晃太郎(昭61)内科医

長(済生会西条病院より)

中島文毅(平1)整外医長

(千大より)

佐原病院

太田要生(阪市大昭45)耳

鼻咽喉科部長(主任医長

より)

景山雄介(昭58)脳外科医

長(救急医療センター

医長より)

増田一哲(平1)脳外医長

(川鉄千葉病院より)

千葉市立海浜病院

加藤喜市(昭36)院長(副

院長より)

鍋嶋誠也(昭47)副院長

(診療局長より)

高橋長裕(昭45)診療局長

(内科部長より)

千葉市保健所

池上 宏(昭53)保健予防

課長(保健管理課主幹

より)

千葉市保健福祉局

石川 洋(昭53)健康管理

課主幹(保健所保健予

防課長より)

Dual Action

2つのCaチャネルをブロックする新しいタイプの降圧薬



持続性Ca拮抗降圧剤

(指) (要指)

アテレック錠5・10

〔シルニジピン製剤, 5mg・10mg錠〕

健保適用

ATELEC® Tab.

【効能・効果】 高血圧症

※詳細は添付文書をご参照下さい。

1回30日間分
投薬可能

〔厚生省告示第111号(平成6年3月29日付)〕



販売元 (資料請求先)

持田製薬株式会社

東京都新宿区四谷1丁目7番地

電話(03)3358-7211(代) 〒160-8515

製造元

味の素株式会社

東京都中央区京橋一丁目15番1号

〒104-8315

るの は な 同窓会報

新旧編集委員の集い

去る平成10年1月14日(水)午後7時からペリエホールにおいて、旧るの は な 同窓会学生編集委員および現編集委員による懇親会が同日開催の編集委員会に引き続き行われた。新旧編集委員の会合は昨年7月の初めての集いから数えて2回目となる。前回の会には出席出来なかった旧編集委員の方々も参加して頂いた。井出源四郎るの は な 同窓会長の新年のご挨拶の後、宴が催された。加藤友衛、青木謹両先生がお持ち寄りになられた「るの は な 同窓会報」の改版第1号から第15号までのバックナンバーを回覧しながら、当時の思い出が語られた。当時のるの は な 同窓会報の完成度は高く立派なものであり、電算機を用いる印刷技術のなかった当時の編集委員の苦労が偲ばれるものであった。宴もたけなわの中新旧編集委員の自己紹介があり、今後のるの は な 同窓会報への思いが語られ、議論も尽きない中次回の会合を約し散会となった。

柳山 俊久 (大8) 永井 義三 (昭10) 中村 英五郎 (昭13) 稲村 保三 (昭16) 堀内 満伸 (昭19) 石井 一涼 (昭20) 生駒 卓亮 (昭20) 河野 実爾 (昭20) 齊藤 行実 (昭20) 山田 猛太郎 (昭23) 吉村 寛太郎 (昭24) 今井 裕之 (昭25) 赤松 義雄 (昭28) 多島 昭暢 (昭29) 石坂 昭三 (昭32) 大川 昭三 (昭33) 秋本 昭三 (昭35) 瀬川 雄大 (昭41)

おくやみ



彦(昭46・新旧)、鈴木信夫(昭47・新旧)、白澤浩(昭57・新)、大野博司(昭58・新)、古関明彦(昭61・新)。(白澤・記)

平成9年度

第三回常任理事会議事録

日時…平成10年2月25日
場所…ペリエホール 扇の間
(千葉駅ビル5F)
出席者…井出 源四郎、加納六郎、渡辺 武、山上健次郎、平形義人、笠川猛、茂又真裕、貫洞一夫、萩原彌四郎、長沢仁一、越川衛、小幡裕、柴崎晃、森博志、近藤洋一郎、佐藤甫夫、嶋田裕、木内政寛、伊藤晴夫、中島祥夫、鈴木信夫、矢野明彦
開会に先立ち、井出会長より会の活性化などのお話と挨拶があった。

議題

- 一、平成10年度諸会議予定について説明があり承認された。
- 二、名誉会員の推薦について、三万淳男先生、磯野可一先生、新美仁男先生が推薦され承認された。
- 三、同窓会活性化対策について、同窓会費自動振替各地るの は な 同窓会との連絡強化、などが討議された。
- 四、その他
以下の項目について報告があった。
(1)同窓会活性化について
(2)同窓会名簿を平成11年11月に発行予定
(3)千葉大50周年記念行事の寄付について
(4)図書館多摩分館特別助成

るの は な 同窓会賞選考経過

一、平成9年1月31日付中間決算について中島理事より報告があり審議了承された。
二、同窓会会報関係
鈴木理事より一六号(発行済)、一七号(5月発行予定)について説明があった。
(1)発行状況
(2)今後の発行内容の検討
(3)各地るの は な 会報発行状況の説明
(4)企画 各地編集委員会との連携
(5)号外の発行
四金会…引き続き同所で、四金会が行われた。佐藤理事の司会で、井手会長の挨拶、佐藤副会長の乾杯に始まり、和やかに歓談の時を過ごし、会の途中、田邊助教授はか御招待の先生方について紹介、および各先生方より御挨拶や抱負などを伺った。若い先生方も多数出席され賑やかで、活気に溢れた会であった。多世代の交流・交換がますます発展するよう期待している。
(文責・矢野)

平成10年度

第一回常任理事会議事録

日時…平成10年4月22日(水)
4:00~5:30
場所…センシティ東天紅
出席者…井出会長、渡辺、近藤副会長、大藤参吾、笠川監事、茂又、萩原、越川、小幡、阪、佐藤、嶋田、本島、増田、木内、中島、鈴木、矢野各常任理事。
開会に先立ち、井出会長より御挨拶があった。

議題

- 一、平成9年度決算案(別記)が監事報告のあと承認され、総会で提案する

編集後記

商業紙も含め、新聞の危機が謳われてから、久しい感じがします。ラジオ、テレビ、そしてインターネットなどが現れるたびに「文字文化の牙城危うし」と言われてきております。しかし、万人の五感を全て一括して満足させる通信手段はないようです。商業紙は、その種類や発行部数などにおいて、益々増大の一途をたどっているからです。

るの は な 同窓会報も、会員各位のご協力を得て、百号の大会を突破した後、年3回の発行が定着し、各回

ことになった。

- 二、平成10年度予算案が承認され、総会で提案することになった。
- 三、理事(磯野、新美両理事の後任)補充に税所、大沼両教授が推薦、承認された。
- 四、同窓会賞選考結果が嶋田理事より報告があり承認された。
- 功労賞 安村 美博 杉本 和夫 大野 博司 磯野 史朗 篠藤 仁 赤坂 武
- 五、名誉会員および昇任者の四金会招待の件が計られた。

最近では、本誌の内容を更に充実させるにはどうすべきか、編集委員一同知恵を絞っている所です。るの は な 随想を展覧的に解消させ、論説を掲載するなど、多種多様な企画を試みようとしております。

六、総会(6月千葉開催)議案が確認された。
七、その他
(1)千葉大学50周年記念募金関連記事をるの は な 同窓会報へ掲載することにした。
(2)同窓会費自動振替のこと、会報関係などについて報告と意見交換が行われた。
(文責 矢野)



るの は な 同窓会報の今後のあり方について、同窓会員と編集部委員との懇談の場を同窓会総会が開催される6月13日(土)に、総会開催前12時より同会場で開催しました。予定しているテーマはつぎの通りです。
一、会報の編集と発行についての過去と現状の報告
二、各地るの は な 同窓会における会報発行の現状
三、会報の果たす役割と新企画などについて懇談
参加希望者は、同窓会事務室あて、または、
FAX 043-1226-2038
あてご一報下さい。参加費無料です。